

水曜通信 29

東北学院大学研究ブランディング事業通信
「東北における神学・人文学の研究拠点の整備事業」

2020年
1月

第29回水曜礼拝（公開大学礼拝） 2020年1月15日（水） 18:30-19:00



説教：原田 浩司（本学文学部准教授）
奏楽：小野 なおみ（本学礼拝オルガニスト）

<礼拝次第>

前 奏：J.S.バッハ「高きにいます神にのみ栄光
あれ」BWV662

讃美歌：120番「いどうたえ友よ」

聖 書：エフェソの信徒への手紙 5章6-20節

讃美歌：411番「すべしらす神よ」

説 教：「キリストの光」

頌 栄：544番「あまつみたみも」

後 奏：J.S.バッハ「高きにいます神にのみ栄光
あれ」BWV715

後奏の後、グリークラブOB合唱団による合唱での賛美を行ないます。

次回第30回水曜礼拝は2月19日です。

第28回 水曜礼拝報告（説教：川島堅二、奏楽：小野なおみ）

2019年12月18日（水） 18:30-19:00

讃美歌：94番「ひさしくまちにし」

聖書：マタイによる福音書 2章1-12節

讃美歌：103番「まきびとひつじを」

説教：「キリスト教と占星術」

頌栄：541番「ちちみこみたまの」



【説教要旨】

マタイ福音書はユダヤ人に対して書かれた福音書ですが、排他的な民族主義を批判し、それを乗り越える試みをしています。誕生した救い主イエス・キリストを最初に訪問したのが異国の占星術師たちだったという記述もその一つです。

当時のユダヤ人にとって、異国の占星術は全く無力な気休めで神の目に悪とされるとさえ考えられていました。

ところが、マタイ福音書によれば、ユダヤ人の賢者、祭司長や律法学者たちではなく、異国の占星術師たちが彼らの星を占う術に導かれてキリストを最初に礼拝する光栄に預かったというのです。これは当時のユダヤ人にとっては到底受け入れがたい事態だったでしょう。これは、キリスト教がその当初から民族・国境を越えた普遍性を志向していたことを明確に示しています。

（川島堅二）

前奏：G.B.ネヴィン「羊飼いたちの夕べの祈り」

後奏：J.S.バッハ「暁の星はいと麗しきかな」BWV1-6

前奏を作曲したG.B.ネヴィンは19世紀半ばにアメリカの音楽一族に生まれ、作曲家、歴史家、実業家として多彩な才能を発揮しました。後奏の原曲はバッハのカンタータ第1番の最終曲であり、4声の合唱の上に2本のホルンが装飾的な旋律で輝きを与えます。（小野なおみ）



礼拝とその後の19時00分から30分までの東北学院大学宗教部聖歌隊によるメサイア独唱曲での賛美に64名の市民が参加されました。

礼拝後、メサイア独唱曲による賛美

今回は宗教部聖歌隊4年生による『メサイア』独唱曲での賛美を行いました。テノールの横田尚輝さんは第2曲及び第3曲を、バスの藤江惟志さんは第10曲及び第11曲を、ソプラノの大橋奈々さんは第18曲及び第38曲を歌い、プログラムの最後には会衆の皆様と共に『ハレルヤ』を合唱しました。今回の水曜礼拝で、今井奈緒子先生に伴奏者を務めて頂いたことは、4年生にとってかけがえのない経験となりました。また、水曜礼拝に向けて、聖歌隊の中川郁太郎先生からは発声や指揮について多くのご指導を頂きました。先生方には心より御礼申し上げます。また、これまでの4年間で私たち4年生に関わって下さった全ての方の未来が、大いなる光に満たされることを切に祈っております。

（宗教部聖歌隊4年 学生指揮者 菊池晏生）



2019年度東北学院大学研究ブランディング事業主催 第3回ジョン・ラファージ研究シンポジウム 「ボストン・ブラーミンのキリスト教と仏教：教義と寛容」開催

12月21日、第3回のラファージ研究シンポジウムを開催した。今回はラファージの出自であるボストンのエリートたち（ボストン・ブラーミンと呼ばれる）の信仰について、フェノロサ、ピゲロー、そしてパーシヴァル・ローエルという明治初期に日本に滞在し、日本とアメリカの両国にとって重要な3人に注目した。その中心はハーヴァード大学、信仰は、ハーヴァード大学の学内にスエデンボルグ礼拝堂を持ち、建物に超越主義者エマソンの名を冠するユニテリアンのキリスト教である。まず企画者の鐸木は、仏教とキリスト教が、超越という限り旧約レベルでは一致すること、ただし物質となった神をいう受肉とあくまで方便としての物質をいう本地垂迹との間に違いがあることを示した。パネリストのダヴィド・エッケル氏もボストンの仏教とキリスト教について、両者を弁証法的関係ではなく、同じ信仰として語り、ロジャー・ウォーナー氏は、ピゲローの末裔であり、ピゲローのボストン社会からの逃避について、キャロル・バンディ氏もパーシヴァル・ローエルの子孫であり、ローエルにとって、物質世界を超えるものとして日本や朝鮮に求めたものは、最後に火星に至ったことを説明した。会場には専門家が東京、岐阜、岡山から詰めかけ、シンポジウム終了後もパネリストたちとの議論が続き、いかにも明治初期のボストンのエリートたちが現在の東北学院に再来したかのようであった。

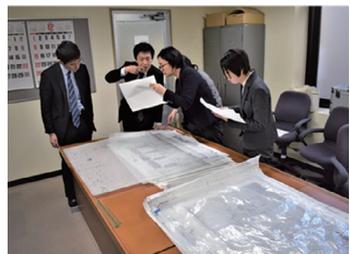
（鐸木道剛）

一 建築との対話：礼拝堂建築調査の現場から（6）一

長い年月を経て多くの人々の記憶に刻まれた建築は私たちにとってかけがえのない文化遺産ですが、同時にその建築が構想され、実現されていく過程を記した建築図面や書簡もまた、貴重な文化遺産と言えます。独特の表現を有し、極めて精緻に描かれた建築図面は、時に独立した芸術作品として評価されることもあります。

今回、研究ブランディング事業の一環として、建築家モーガンや、礼拝堂の施工者等が書いた建築図面と関連する書簡の一部を、電子化して保存することに取り組みました。90年の歳月を経て劣化の著しい資料も多いことから、これらを建築とともに長く継承することが趣旨です。一方、建築内外に精緻な装飾を有する礼拝堂の建設に際しては、原寸図をはじめ数多くの詳細図が作成されており、非常に見応えがあります。図面そのものを改めて公開することも検討したいと考えています。

（崎山俊雄）



— ランカスター神学校での発見 (14) —

「元宣教師から寄贈された写真」



タッシュ先生とメンセンディク先生と共に



アルバムを受贈

ランカスターでの資料調査を終えて、ロスアンゼルスに移動した翌日、ボモナ市のポップ・タッシュ先生とクレアモント市のバーバラ・メンセンディク先生をお訪ねしました。お二人とも戦後宣教師として本学に奉職され、現在は高齢者と引退宣教師のためのホームに住んでおられます。

タッシュ先生は、目が不自由になられ、趣味で撮影された数千枚のスライドからご自分で学院関係のものを選り出すことは難しい様子でした。無作為に見せていただいた中から戦後間もない頃の仙台を写したものを数枚寄贈していただきました。

メンセンディク先生からは、ご主人のウィリアム・メンセンディク先生が最初の任期の1948（昭和23）年から3年間に撮影したと思われる写真を収めたアルバムを寄贈していただきました。戦後仙台に帰任した他の宣教師や当時の教職員との交流の様子が伺えます。

ちなみに、当史資料センターにはグロー先生やメルカート先生など、同じく戦後に東北学院に来任された元宣教師から寄贈されたアルバムも保存されています。

（東北学院史資料センター 日野 哲）

研究ブランディング事業公開講演会開催のお知らせ 「第二次大戦後のコモンウェルスの再編と変容」

日 時：2020年1月25日（土）14：00～17：00

会 場：土樋キャンパス ホーイ記念館ホール

講 師

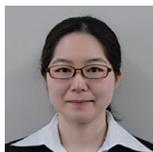
■原田 桃子（米子工業高等専門学校教養教育科助教）

イギリスの入国管理政策の展開と移民送出国

■佐藤 滋（本学経済学部准教授）

グローバル・ヒストリーからみた戦後イギリス福祉国家の
形成と変容

—ベヴァリッジ・プランの再編論争を中心に—



文部科学省私立大学研究ブランディング事業とは：

学長のリーダーシップの下、大学の特徴ある研究を基盤として、全学的な独自色を大きく打ち出す取り組みを行う私立大学に対し、施設費・装置費・設備費と経常費を一体的に支援するもので、各大学の特色化・機能強化の促進を目的としています。東北学院大学は、「東北における神学・人文学の研究拠点の整備事業」との事業名で平成28年11月22日に採択されました。

東北学院大学研究ブランディング事業通信
第29号

2019年1月10日発行

〒980-8511 仙台市青葉区土樋1-3-1

TEL：022-264-6547

E-mail：branding@mail.tohoku-gakuin.ac.jp

URL：http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/theology/